

# アクティブ・ラーニング導入の立場から 見たオーストラリアの教育実践

——フィールド・ワークの成果を中心とした考察——

浮 田 真 弓

## 1. はじめに

### (1) 近年の日本の教育動向

平成28年度中に新しい学習指導要領が告示される予定で関連した情報がマスコミでも取り上げられることが増えている。アクティブ・ラーニングも注目された事柄の一つである。「育成すべき資質・能力」として、コンピテンス（またはコンピテンシー。本稿ではコンピテンスを使用する。）も注目されている。

コンピテンスは、実際に仕事において結果を出している人々の結果につながっている特徴であると操作的に定義されたものであり、知識やスキルといった認知側面だけでなく、態度や特性といった非認知的側面まで含んでいる。

福田（2015）では以下のようにコンピテンスを端的に説明している。<sup>1</sup>

考え方を学ぶとか、疑問を持ってよく考えるとか、他人と上手に交流して全体をうまくまとめるとか、親や教師は子育てや学校教育の中で何気なくそれを教えてきた。教科の知識や技能は教科書や教材、問題集という形で目に見えるようになっており、いわゆるカリキュラムができ上がっている。ところが、それと並行して、何気なく教えてきた別のカリキュラムが現実には存在する。それを教育学では「隠れたカリキュラム（hidden curriculum）」と呼んでいる。これを「可視化」「見える化」しようというのが、コンピテンスの測定なのである。「あいつは頭がいい」という評価を分解して、「何ができるから頭がいい」というコンピテンスを取り出す。そして、このコンピテンスを、個々にあるいは組み合わせて育成できる教育活動を法則化しようというのが、現在の課題になっている。

コンピテンスを育てるということは従来の一斉授業で知識を注ぎ込むようなやり方だけでは十分に育てることは難しい。引用部にあるように「考え方を学ぶ」「疑問を持ってよく考える」「他人と上手に交流して全体をうまくまとめる」ということは知識を基に子どもたちが学習活動を行うことによって初めて指導が可能となるからだ。このような文脈の中で、アクティブ・ラー

ニングへの関心が高まっている。<sup>2</sup>

現在の研究の進展の速さを考えると学校で学ばれる知識は卒業するころには役立たなくなってしまう。教師の役割のうち単純な知識の伝達についてはネットの検索技術によって、かなりの部分が代替される。従来の基礎基本の考え方は抜本的な変更を強いられるだろう。

このように現在進められているコンピテンスに関する議論を踏まえた説明のうえで、福田（2015）は日本の教育改革の方向を以下のように整理している。

日本政府は、いわゆる「二足わらじ型」の学力を追及していくことになるだろう。すなわち、①教科の学力、従来の知識・技能重視ではあるが、応用力をより重視することと、②教科横断的な、あるいは教科を超えたコンピテンス、とりわけ大学では学士力という形で職場に直結する力を確立する、というものだ。従来、人格形成の分野にあった特別活動なども使いながら、教科を総合する活用的能力に注目し、国際標準の尺度に合わせて意識的にコンピテンスを育成する教育に変えていかざるをえない。

当然だが、知識や技能を必要としない応用力などというものは存在しないだろうし、いわゆる知識や技能もこれまで以上に汎用性が高いものを指すようになるだろう。

このような変化は日本のみならず、世界的な変化である。同様の変化の中で、諸外国の対応に関心が高まっている。その関心の範囲は教育政策のみならず、実践レベルにも及んでいる。情報がネットなどで即時に拡散される環境にある現代では、諸外国の取り組みに関する情報を集めることも容易である。実践に関しても、ネット上の映像で見ることでもある。以前に比べれば、情報に接するための環境は整っている。

このような現状を踏まえて、筆者は平成28年10月24日～11月3日までオーストラリアの教育実践の視察を行った。外国の教育実践やそこで働く教師に話を聞くという研究的な関心は、これまで筆者が行ってきた日本の教育現場を対象としたアクション・リサーチの延長線上にあるものでもある。オーストラリアの教育実践に関するフィールド・ワークは日本の教育現場へのアクション・リサーチにも良い影響を与える。このような研究的関心でフィールド・ワークを行った。

## （2）オーストラリアへの関心

オーストラリアに関心を寄せるきっかけは、オーストラリアが白豪主義という人種差別主義的な政策を経て、多文化主義政策をとったことが研究的な関心を集めていたことである。そのオーストラリアが近年全国統一カリキュ

ラムを実施し、2016年にはすべての教科においてカリキュラムが実施されることになった。多文化主義政策によってそれぞれの移民の文化的背景を尊重しているように考えられていたオーストラリアが「オーストラリアのカリキュラム (the Australian Curriculum)」という全国統一カリキュラムを実施することは多文化主義政策から次の段階をめざしていると考えられる。具体的にはオーストラリア人としての文化的アイデンティティーの確立である。文化的アイデンティティーの普及にもっとも力を発揮するのが、公的な側面では教育であり、非公式な側面ではマスメディアである。

オーストラリアのメディア教育に関して、日本でも多くの情報が入ってきている。それをさして、オーストラリアはメディア教育が進んでいるという言い方がなされることがあるが、オーストラリアはメディア教育を進める必要性があって行われている。多くのメディア教育に熱心な国々が、移民を多く抱える（抱え続ける）国であり、移民が必ずしもその国の公用語を十分に使える状態にないこと、そのことが彼らをして映像メディアの影響を受けやすい状態にしていること、そのためにメディアのメッセージを読み解いて、そのメッセージを相対化することが重要視されているということが背景として考えられる。その点では、日本のように多くの国民が日本語を不自由なく使える状態にあるのとは大きく異なっている。

このように、教育政策にはその国が何を重視しているかがあらわれるのであって、単純に進んでいる、遅れているという軸ではとらえられないのである。

オーストラリアは移民の国である。異なった文化背景を持った人々がコミュニティを作って暮らしている中、全国統一のカリキュラムで教育を行うことが困難であったことは想像に難くない。しかし、現在では家庭で英語のみを使用する人の割合は全人口の8割を超えようとしており、少なくとも言語使用における多様性は以前と比較して少なくなりつつある。

2016年はすべての教科でオーストラリアのカリキュラムが公表された年である。2008年のメルボルン宣言に始まる教育改革の完成期にはいったということができよう。

## 2. オーストラリアの教育

初等・中等教育に関する権限は各州政府にあり、義務教育の多くは6～15歳（ただし南オーストラリア州、タスマニア州では6～16歳）である。新学期は2月にスタートすることなど、日本とは異なっている点が多い。

オーストラリアの現在の教育については2008年に出されたメルボルン宣言に基本的な考えが示されている。

メルボルン宣言（2008年）<sup>3</sup>

目標1：オーストラリアの学校教育は、公正（equity）と卓越性（excellence）を促進する。

目標2：オーストラリアのすべての若者は

- －成功した学習者となる。
- －自信に満ちた創造的な個人になる。
- －活動的で知識のある市民となる。

メルボルン宣言では連邦および各州政府が共同で取り組むべき領域として以下の八分野をあげている。<sup>4</sup>

- ①より強固なパートナーシップの開発
- ②優れた教育活動と学校のリーダーシップに対する支援
- ③就学前教育の強化
- ④中学年（middle years）での成長の促進
- ⑤学校教育の上級学年と若者の進学（移行）支援
- ⑥世界水準のカリキュラムと評価の促進
- ⑦先住民の若者、また特に社会経済的に不利な立場にある若者の教育成果の改善
- ⑧アカウンタビリティと情報の透明性の強化

このメルボルン宣言で世界水準のカリキュラムとされているものが「オーストラリアのカリキュラム」である。

### 3. 「オーストラリアのカリキュラム」の概要

#### （1）学校系統と教科

修業年限は州によって違いがあるが、ニューサウスウェールズ州においては義務教育は10年生までである。6年生までが小学校、7～10年生までが中学校にあたる。

ニューサウスウェールズ州の場合、小学校の教科は

- ・ English
- ・ Mathematics
- ・ Science and Technology
- ・ Personal Development, Health and Physical Education
- ・ Human Society and Its Environment
- ・ Creative Arts

- ・その他の活動
- 中学校の教科は
  - ・ English
  - ・ Mathematics
  - ・ Science
  - ・ Technological and Applied Sciences - Food Technology, Graphics Technology, Industrial Technology, Information & Software Technology, Textiles Technology
  - ・ History, Geography, Commerce
  - ・ Dance, Drama, Music, Visual Arts, Photography and Digital Media
  - ・ Personal Development Health and Physical Education
  - ・ その他として、Languages - Many offered. All Year 7 and 8 students study minimum 100 hours of a language other than English (筆者注：いわゆるLOTE＝英語以外の言語)

となっている。

これらの教科の中で汎用的能力（General Capabilities）が育成されることがめざされている。

## （２）オーストラリアにおける汎用的能力

日本においても、汎用的能力は議論されているところである。日本における汎用的能力の内容はオーストラリアのそれとは違っているが、汎用的能力を教科をこえた形で設定し、それぞれの教科の中で、指導していこうというオーストラリアのカリキュラム編成は参考になると考えられる。実際に、汎用的能力をどのくらい意識して指導が行われているかも、視察の注目点になると考えられた。

オーストラリアでは七つの汎用的能力が教科それぞれの中で指導されることになっている。

七つの汎用的能力の内容を以下に示す。<sup>5</sup>便宜的に通し番号をうつ。

### ① リテラシー（literacy）

児童生徒は、学校で自信を持って学習し、コミュニケーションするスキルを発達させ、有能な（effective）個人、コミュニティの構成員、労働者及び市民となることを通して、リテラシーを身に付ける。これらのスキルには、全ての学習領域で、正確かつ明確な目的を持って、聞くこと（listening）、読むこと（reading）、鑑賞すること（viewing）、話すこと（speaking）、書くこと（writing）、印刷・映像・オーディオ資料を創ること（creating）を含む。

### ② ニューメラシー（numeracy）

児童生徒は、学校で、また学校を離れた実生活において、数学を使うスキルと自信を発達させることを通して、ニューメラシーを身に付ける。学校教育の文脈では、ニューメラシーは、児童生徒が全ての学習領域の理解に必要な、あらゆる数学的知識やスキルを認識し、それに従事することを意味する。

### ③ ICT 技能 (ICT competence)

児童生徒は、ICT を効果的に活用し、全ての学習領域で、又は学校を離れた実生活において、問題を解決し、他者と協同するために必要とされる情報やアイデアに適切にアクセスし、創造し、それを活用することを学ぶことで、ICTの能力を発達させる。

### ④ 批判的・創造的思考力 (critical and creativethinking)

児童生徒は、知識、アイデア、可能性を統合・評価し、新たな方法・解決法を必要とするときにそれらを活用することで、批判的・創造的思考力や推察力を発達させる。これは、全ての学習領域で、理由、論理、処理能力、想像力及びイノベーションを要求する活動において深く、幅広く考える学習を含む。

### ⑤ 倫理的行動 (ethical behaviour)

児童生徒は、倫理的事項を認識し理解すること、合理的判断を下すこと、それにより各人の倫理的枠組みを発達させることにより倫理的理解を育成する。これは、人間生活における倫理原則や価値の役割を理解する、品位を持って、また他者の権利に敬意を払い行動する、公共善のために行動する意志を持つことを含む。

### ⑥ 異文化間理解 (intercultural understanding)

児童生徒は、他者との関係において自己を理解することにより異文化間理解を発達させる。自身の文化や信条、他者のそれらを尊敬し享受することを学ぶ。これは、違いを認め、つながりを構築し、相互理解を確立することにより、言語的・社会的・文化的に多様な人々と従事し、個人、グループ、そして国家のアイデンティティがどのように多くの異なる歴史や経験によって形作られるのかを理解することを含む。学校教育の文脈では、児童生徒が言語や制度・慣例 (institution)、実践の多様性について学習し、グローバルな多様性に関する複雑な問題についての視点を発達させることを含む。

### ⑦ 個人的・社会的能力 (personal and social competence)

児童生徒は、自分自身及び他者について十全に理解し、お互いの関係性や人生、学習、仕事を効果的に運用することを通して個人的・社会的能力を発達させる。これは、自らの感情を認識・統合し、積極的な関係性を確立し、責任ある決定を下し、チームで効果的に動き、困難な状況にも建設的に立ち向かうことを含む。

ここでは、学習領域と訳されているが、3. (1) 学校系統と教科で教科と呼んでいるものと同じである。

ACARAのHPのカリキュラムにはそれぞれの教科にこれらの汎用的能力を示すアイコンをのせることで、教科横断的な指導を実現しようとしている。

## 4. 視察報告

### (1) 七つの汎用的能力の指導

七つの汎用的能力に関して、小学校においてはかなり意識的に取り組まれていることが小学校の視察の際の質疑において明らかになった。リテラシー、ニューメラシー（日本で言えば、読み書きそろばん、あるいは3R's）にたびたび言及されていたが、倫理的行動という言葉もそれらに次いで言及されていた。

アクティブ・ラーニングに関しては、小学校においては、アクティブ・ラーニングが以前には取り組まれていたが、いわゆる基礎学力が低下したとの批判をうけ、基礎基本重視の指導が行われ、また、近年アクティブ・ラーニングの動きが出たことで、これまでの指導との整合と融合を図るために日々指導の改善に取り組んでいるという実状が語られた。これは日本においてもアクティブ・ラーニング導入の結果、予想されることである。この点においては、オーストラリアに学ぶことは多である。

視察先のジャスパー・ロード小学校（Jasper Road Public School）では、子どもたちの学力の状態を常にLiteracy Learning ContinuumやNumeracy Learning Continuumなどでどのレベルにあるかを確認するようにしているということだった。活動的な学習方法をとる場合には指導の過程での評価が重要になる。オーストラリアでは活動的な学習方法に合わせたContinuumと呼ばれる評価表が作成され、ネットで公開されている。このContinuumは七つの汎用的能力に対応して作成されている。このため、常に七つの汎用的能力を意識して指導がなされることになる。

どの学校でもクラスサイズは30名程度かそれ以下であり、アクティブ・ラーニングに取り組むために、クラスサイズを日本においては小さくすることが課題となるだろう。そのことによって、評価を適正に行うことが可能になり、個に応じた指導が実現されるだろう。

### (2) ICT活用

アクティブ・ラーニング導入にあたり、子どもの個に応じた指導が行われることが予想される。一斉に同じ作業をする場面は今後ますます減っていくだろう。そのための学習環境としてICTの整備が必要になると考えらえる。

日本においても、多くの地域でタブレットが導入されている。オーストラリアの視察先では多くはパソコンか、タッチパネル式のホワイトボードを使



用していた。

多くの学校において、教師たちは「子どもたちは何か知りたいことがあれば、教師に聞くのではなく、タブレットやパソコンで調べる。だから、教師の役割は変わっていかざるをえない。」と繰り返し語っていた。アクティブ・ラーニングの導入によって、知識を伝達する教師像から、子どもたちの学びを促進するファシリテーターとしての教師像へと変化していくことになる。

アクティブ・ラーニングの実現のために、これからは学校での積極的なICT活用がすすめられるようになると考えられる。日本でもデジタル教科書の活用がこれまで以上にすすめられるだろう。

視察先の多くの教室にプロジェクターとスクリーンが設置され、スクリーンに触れると画面が変化する双方向の機能が備わっていた。あるいは、教師の指示や発問は口頭でも伝えられるが、その後はスクリーンに映し出され、子どもたちはその指示を自身のタイミングで確認することができていた。

タブレットはほとんど見かけなかったが、パソコンを使用している風景は多くの学校で見られた。おもちゃのロボットの動きを考え、プログラムを書き、動かしてみる。しかし、自分の考えた通りに動かないため、もう一度プログラムを書き直すという学習に取り組む子どもの横で、画面上で歯車の動きを学ぶ子どもたちがいた。それらの子どもたちの学習の進行状況は教師のスマートフォンで確認できるようになっている。

あるいは、私立学校では独自のサイト上に授業で使用される日本でのプリント類のようなコンテンツをすべて公開して、授業中、子どもたちはそのサイトを見ながら学習を進めている。机の上には、ノート、パソコン、教科書がひろげられているという状態になっている。

幼稚園でも低く設置されたスクリーンで算数にあたる内容を学習できるゲームで遊んでいる子どもたちも見ることができた。タッチパネル式のスクリーンに触れるとキャラクターが動くもので、子どもたちは繰り返し学習に取り組んでいた。

どこでも共通していたのは、かまえてICT活用というよりは、学習に自然に使用されているという点である。子どもたちが主体的に学ぶためにどのような工夫をしているかという質問に対する答えに、子どもたちに選択させることが必要だというものがあった。子どもたちに選択させることによって、教室での学びがより個別的、多様になるならば、その助けになるものはICTだろう。逆に主体的な学びを保証することを目指して、ICT活用の方法を開発していかなければならないだろう。

## (2) 社会教育施設

これから、アクティブ・ラーニングの推進のためには、教員の研修が不可欠である。授業方法を変えるためには研修の方法も座学では不十分である。



そのため、教員研修施設を視察したいと考えた。また、今後アクティブ・ラーニングを実際に行うためには、社会教育施設との連携が重要視される。そのため、公共図書館、博物館と学校の連携についても調査を行うことが必要であると判断した。メルボルン博物館とヴィクトリア州立図書館での学びを例示する。

メルボルン博物館ではアボリジニをはじめとした先住民に関する展示が充実していた。他の展示テーマ（メルボルンの歴史、人体の不思議、オーストラリアの自然など）と比較して、多くのスペースを割き、タブレット端末が備えられ、観覧者が興味を持った点について、情報が得られるようになっていた。展示物も多く、先住民に対して行ってきた差別などの負の歴史についても、多くの情報が提供されていた。

ヴィクトリア州立図書館では、子どもたちが歴史に興味を持つようにブッシュ・ケリー<sup>6</sup>が捕まった時にかぶっていたかぶとやよろいの模型を付けさせることから始めていた。彼のデスマスクも図書館の中に展示されていた。教員経験があり、かつまた校長としての経験がある図書館員の説明によれば、子どもたちはそもそも歴史に興味を持たない。しかし、この体験から子どもたちはブッシュ・ケリーに興味を持ち、図書館の資料を活用して、学習を進めていったという説明をうけた。子どもたちの興味・関心をいかにひきつけるかということが学習の鍵になる。

これらの社会教育施設では、教員向けのプログラムや子ども向けの学習プログラムが準備されていた。たとえば、ヴィクトリア州立図書館では、小学生向けの学習プログラムも複数準備されていた。メルボルン博物館でも「科学者に会おう（Meet the scientists）」などの生徒向けのプログラムを準備していた。

### (3) THRASS PICTURECHART

小学校の授業において使用されていた教材にTHRASS PICTURECHARTがある。THRASSのホームページ<sup>7</sup>で実物を見ることができる。

THRASSはTeaching Handwriting Reading And Spelling Skillsの頭文字をとったもので、英語の発音と綴りの関係を学ばせる両面印刷されたシートである。英語は綴りと音声の結びつきは多様で複雑である。英語は日本語のように音読が容易な言語ではない。子どもたちが音読できるようになるまでに多くの時間と労力を費やさなければならないことは想像に難くない。

このPICTURECHARTは日本の単語図を思わせるような素朴な絵と単語の綴りを同じ升目に書いてある。me とbeachと treeと keyと pony の5つの単語をあげて、e ea ee ey yの綴りと発音を練習する様子がみられた。

この教材は英語を学んでいる多くの国々で利用されているようで、THRASSの各国での展開をインターネット上に見ることができる。

小学校の掲示で多く目についたものは、単語の綴りを学ばせる目的のものであった。数字、暦の曜日、月など低学年ほど綴りを学ばせる目的の掲示が多かった。

他にもwww.magicwords.com.auとかかれた掲示が見られた。それは、読み書きの学習に重要な300程度の単語を表にまとめたもので、色分けされた紙に印刷され、色に応じた名前（オレンジワード、インディゴワードなど）がついていた。意味的に関連のある単語がまとめられて同じ紙に印刷されている場合もあるが、むしろそれはまれであり、多くは意味的にはあまり関連性なく単語が並べられているものだった。このような掲示をはじめとして、子どもたちが文章を綴るとき、その助けになる掲示が多くみられた。

## 5. おわりに

以上、オーストラリアでの教育実践についてアクティブ・ラーニングの観点から視察した報告を行った。それぞれの視察内容は「見聞きした経験」の範囲を出ないが、できうる限りその背景を探りつつ、日本の教育実践に資する知見を得るべく、考察を続けていきたい。

多文化主義政策からなぜオーストラリアは次の段階をめざすのか、オーストラリア在住の日本人にたずねてみた。日本ではいずれ移民が増える、その時にはオーストラリアの多文化主義政策はよいお手本になるという人が多かったのですよ、と。返ってきた答えは、「多文化主義政策によって、移民がそれぞれの国の問題をオーストラリアにそのまま持ち込んできたという評価があります」であった。教育における国民統合と分離について考える場合にも、一つの事例としてオーストラリアの教育は興味深い。

## 参考文献

諸外国の教育課程と資質・能力ー重視する資質・能力に焦点を当てて

[http://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/h25/2\\_5\\_all.pdf](http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h25/2_5_all.pdf)

青木麻衣子『オーストラリアの言語教育政策ー多文化主義における「多様性」と「統一性」の揺らぎと共存』東信堂

青木麻衣子・佐藤博志編著『新版 オーストラリア・ニュージーランドの教育』東信堂

二宮皓編著『新版 世界の学校』学事出版

越智道雄（2010）『オーストラリアを知るための58章 第3版』明石書店

---

<sup>1</sup> 国立教育政策研究所（2016）『国研ライブラリー 資質・能力[理論編]』42ページ

<sup>2</sup> 現在ではアクティブ・ラーニングよりも主体的な学び、深い学び、対話的な学びという用語がつかわれることが多い。

- <sup>3</sup> ネットで本文を確認することができる。青木麻衣子（2014）「第一部 第一章 社会と学校教育」『オーストラリア・ニュージーランドの教育 グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて』東信堂 14～15ページ
- <sup>4</sup> 同上
- <sup>5</sup> 国立教育政策所のプロジェクト研究「教育課程の編成に関する基礎的研究」の報告書6の「諸外国の教育課程と資質・能力—重視する資質・能力に焦点を当てて—」91ページ オーストラリア編にあげられた表を形式を変更してあげた。出典はACARA, The Shape of the Australian Curriculum Version 3, October 2011, pp.21-22.より抜粋— 91
- <sup>6</sup> 越智（2010）によれば、ブッシュ・ケリーは通称でネッド・ケリーが本名。ブッシュ（内陸部の林など）の中で追いはぎをしていた。追ってきた警察官に反撃したり、銀行を襲ったりした。最後には農具の鉄の部分を加工した防弾具をつけて反撃したが、無防備だった足を撃たれてつかまり、絞首刑になった。この行動が彼と同じ流刑囚の子孫に感動を呼び起こし、君主制を覆して、共和制に転換しようとする人々のシンボルとなっている。
- <sup>7</sup> thrass.com.au 参照。